

## こんな時代にロシア語のすすめ 第9回

# 「子どもキャンプで『王様ごっこ』」

黒田 龍之助

4 月よりロシア語の学習を始めて、半年が過ぎました。「恋人よ～、半年が過ぎ～」という歌詞にもあるように、6 か月はそれなりの時間です。

その半年間で、どのようなロシア語を習ってきたのでしょうか。わたしが教える大学では、もう一人の先生と組んで週 2 回の「ロシア語 I」がありますが、前期の修了段階では、たとえば次のようなことがいえます。

「これはナターシャです」「私はナターシャではありません」「これは私のスーツケースです」「あそこに古い写真があります」「雑誌を読んでいます」「日本語を話します」「彼女はどこに住んでいるのですか」「電話を持っていますか」「音楽を聴いているのですか」「小包を送りたい」……

こういうのを組み合わせれば、結構いろんな表現ができるものです。

もちろん、秋からはさらに勉強を続けなければなりません。過去や未来も表現したいし、与格や造格も身につけたいし、最後には仮定法だって使えるようになりたい。「もし私が鳥ならば～」って、別に鳥じゃないんだからそんな表現はいらない気もしますが、そういうことを表現できるのが、人間の言語の豊かなところ。

いろんな文法を知っていれば、表現に磨きをかけることができます。最初のうちは「これをくれ」とか「便所はどこだ」とか、身も蓋もないことしかいえませんが、語彙と文法が増えていけば、「これをいただきたいのですが」とか「手を洗いたいのですが」といった、優雅な言葉遣いが可能となるわけです。

ただしご注意を。かつて旧ソ連で「手を洗いたいのですが」という婉曲的な表現でトイレに行きたいと伝えたら、本当に手しか洗えない、洗面所に連れてかれて、困ったことがありました。ことばは相手と場所を選ぶものです。

日本語は遠回しで、外国語はストレート。あなたがそれを信じているとしたら、ここで考え直していただきたい。どんな言語でも婉曲表現があります。それにお気づきでないとしたら、相手があなたには無理だと判断し、ふつうだったら大人相手に使わないような、直接的な表現で話しているのです。それはあなたをバカにしているのではなく、理解できる範囲に調整しているのにすぎません。残念ながら、それがあなた



ピオネールキャンプでキャンプファイヤー。  
この中には残念ながら「陛下」はいない

の限界なのです。

秋からも勉強を続けて、あなたのロシア語を「野蛮な伝達手段」から「優雅な言葉遣い」に成長させてください。

言語はデリケートな表現ができることを目指して、日々磨きをかけるものだと考えるのですが、不思議なことに世間はその正反対を声高に主張します。

言語はツールである。

違いますね。そんなことをいつているから、たいした外国語が使えないのです。相手に不愉快な想いをさせながら、いいたいことがだいたい伝わっているからそれでいいじゃん自分を納得させるのは、どこか虚しくありませんか。何よりも相手の反応を見れば、評価されていないことは自ずと分かってしまうもの。

ことばにはいろんな伝え方があります。ふつうはなるべく一般的なものを選び、さらにはビジネス用の表現なんかを勉強する人が多いですが、そもそもビジネス外国語という分野は存在しません。ビジネスに限らず、語彙はどの分野でも独特なものがあるものの、それ以外は全人格を賭けて、真剣に話すしかないので。

ところがです。ちょっと面白い表現を覚えると、使ってみたくするのが、私の困ったクセなんですよね。

子どもの頃から物語を山ほど読んで育ちました。実話や偉人伝が苦手で、空想的でナンセンスなものが好きでした。お伽話も大好きで、遠い国のお姫様や騎士の話も面白がって読んでいました。

こういう読書傾向は、外国語を学ぶときも変わりません。ソビエト時代から始まったわたしの外国語学習は、当時の世相とは程遠い、ファンタスティックなものに首を突っ込んでいました。

たとえばサムイル・マルシャークの『森は生きている』。翻案物ではペロー童話の『長靴をはいた猫』。ロシア語の授業では決して取り上げられることのない、でもロシア人だったら子どもの頃から親しんでいるに違いない、豊かなお伽話の数々が、わたしにはとても魅力的でした。

大学 4 年生の夏、ナホトカのピオネールキャンプ場で、通訳として過ごしました。もちろん JIC のお仕事です。ふだん

はキャンプ場の指導者に同行して通訳をしていましたが、子ども相手に遊ぶことも仕事のうちでした。極東大学日本語学科2年生のサーシャくんと組んで働いたのですが、子ども相手のときは彼がサッカー担当で、わたしが水泳担当。ロシア人の子どもに、海で泳ぎを教えたこともありました。

ピオネールは小学校3年生から中学校3年生くらいの子どもが対象ですが、キャンプ場にはもっと小さな子もいました。オクチャブリヤータという年少さんなんですけど、とくにグループを形成しているようには見えません。おそらくお兄さんかお姉さんがいるからいっしょにキャンプ場へ送り込まれたのでしょう。

そんな一人と仲良くなりました。

おそらく小学校に上がるかどうかといった年齢だったのでしょう。金髪の巻き毛でかわいい男の子だったのですが、同年の子がいないせいか、いつもつまらなそうにキャンプ場内を、後ろ手に組んで歩いていました。

そこで声をかけてみることにしました。でも、ふつうにあいさつするのは面白くない。いきなり彼の前で膝まづき、右手を胸に当て、左手は後ろに伸ばして、こういいます。

「陛下、なんなりとご命令を」

その子がいつも後ろ手に組んで歩いている姿が、わたしには小さな王様に見えたので、こんなふうに声をかけてみたのです。お伽話を読んで覚えたのですが、使う場面がなくて(そりゃそうです)、それでもいっぺん使ってみたかったのです。もちろん、男の子は大喜びして答えます。

では、そこら辺を走って参れ。

わたしは周囲を一周して、再び彼の元に戻ると、次の命令を待ちます。こんなことをして、遊んでみたのです。

やあ、元気。何しているの。これからどっか行こうか。

こういう口語表現はどれも実用的です。でも、ときには違った文体も使ってみよう。

陛下、ご機嫌麗しゅう。

物語ばかり追い求めていたおかげで、ヘンな語彙が身につきました。それもときには面白い。といいますか、現状に合った表現だけで満足してしまうと、外国語は語彙も文法も伸びないのです。ときにはこんなふうに、非現実的な表現を使ってみるのも、実はなかなか楽しいものでした。

あるときロシア人学生研修で、引率していた30代ぐらいの女性に、わたしはバスの中であいさつしました。

奥さま、あなた様のお隣に座る名誉をわたしにお授けくださいませでしょうか。

学生たちは大爆笑していましたが、引率の女性は平然と隣に座る許可を与えてから、こういいました。

「あなたは紳士の表現を知っている。あの学生たちはまだまだね」

わかりますか、複雑な文法はこういう為にあるのです。

## 本の紹介

### 「板ばさみのロシア人～プーチン時代に生きる狡知と悲劇」



ジョシュア・ヤッフア著  
長崎泰裕訳  
白水社  
定価 4600 円+税

著者は、米誌「ニューヨーカー」モスクワ特派員としてロシアを取材するアメリカ人ジャーナリスト。プーチン時

代のロシアに生きる人々の成功と失敗、葛藤や妥協とともにそのしたたかな生きざまを描く。

第1章から第7章まで、プーチン体制(=権威主義体制)の下で、チャンスを得て成功を収めた体制派から、その抑圧に抗いつつ協力した人、成功を収めながら一転「犯罪者」とされた人、一貫して良心に従って抵抗を続けた反対派まで、さまざまな立場の人々に取材しており、各章それぞれが一つの物語となっている。

[本書の主な登場人物]として本書裏表紙に記載されている人たちを紹介しておく。

コンスタンチン・エルンスト 「プーチン政治の映像プロデューサー」とも言うべき、国営テレビ局の最高責任者。

ヘーダ・サラトワ チェチェン戦争の悲惨な現実を目の当たりにして人権活動家として目覚める。

パーベル・アデルゲイム ロシアで尊敬を集めた聖職者で、教会を厳しく批判したことで知られる神父。

オレグ・ズプコフ クリミアで親ロシア派として住民投票し、夢と併合後の現実の間で悩む実業家。

セルゲイ・コワリョフ ソヴィエト強制収容所での流刑を経て、人権団体「メモリアル」の創設に参加。

エリザベータ・グリーンカ プーチンから評価され、政権と歩調を合わせて慈善活動を行うが、航空機事故で死亡。

キリル・セレブレニニコフ 国家資金横領で自宅軟禁処分を受けた、ロシア演劇界きっての演出家にして映画監督。

「プーチン世代」の普通の若者たち 開放的で野心もあるが、今ある安定を望み、「ポスト・プーチン時代」を予想させる群像。

著者の分析の視点は序章に示されている。独立世論調査機関「レバダ・センター」の創始者である社会学者ユーリー・レバダが「ソ連人」(ホモ・ソヴィエティクス)を分析するた